

## 祭囃子の教材化試案 内野先太鼓の事例から

伊野 義博 (芸術環境講座・音楽科教育)

松浦 良治 (芸術環境講座・声楽)

森下 修次 (芸術環境講座・音楽科教育)

学校の音楽授業における地域の音楽の教材化について、新潟市内野地区における祭囃子のうち先太鼓の調査及びそれを元にした教材化について考察および提案を行った。内野の先太鼓は非常に変化に富んだ有意義なものであることが分かった。その先太鼓の音楽を学校現場で取り入れやすいよう、教材化の提案を行った。

[キーワード] 伝統音楽 音楽科教育 囃子 新潟市内野地区

### I はじめに

本研究の目的は、学校の音楽授業における地域の音楽の教材化について、その方法論の一端を提案すべく、新潟市内野地区における祭囃子のうち先太鼓の事例を通して考察するものである。

地域の音楽は、学習指導要領に示された、「それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを取り上げるようにすること」、鑑賞教材における「郷土の音楽」の取り扱い(以上、小学校)、表現教材としての「郷土の民謡」、鑑賞教材としての「郷土の伝統音楽」(以上、中学校)といった内容を取り上げるまでもなく、児童・生徒自身に直接つながる音楽文化として、あるいは表現・鑑賞の学習の貴重な教材として、音楽授業において重要な位置を占めるものである。また、昨今、総合的な学習の時間が設定されるにあたり、「地域」に目を向けた学習も多く見られるようになり、これらのことからこれまで種々の実践が報告されてきた<sup>1)</sup>。

地域の音楽の実践に関する理論的な研究としては、音楽の持つ教材性として「親近感、音楽性の覚醒、文化的特性、郷土理解、社会性」<sup>2)</sup>といった内容や学習法における唱歌の活用<sup>3)</sup>、動きと一体と

なった学習の必要性<sup>4)</sup>など、重要な指摘がなされてきた。

本論では、こうした先行研究を踏まえながら、一つの地域の音楽を対象とし、その音楽を実際に取材、体験し、伝承の様子と音楽の特徴を明らかにする中で、地域の音楽の持つ教材性について考察し、授業実践へ向けた提案をする。つまり、地域の音楽を学校の音楽授業実践に結びつけるまでの過程を実際にたどりながら、そこに見えてきた事実から音楽授業の発想を見つけだそうという試みである。

### II 研究の対象(内野祭と先太鼓)

対象となるのは新潟市内野地区において、毎年9月14日、15日に行われる内野祭の祭囃子のうち先太鼓である。祭礼で中心となるのは、神輿の渡御と各町内の山車の行列、民謡流し等である。中でも、祭のメインは、各町内から出される山車で、町内ごとに異なったキャラクターを制作し、それを乗せて華やかに飾り、民謡を流し踊りながら、にぎやかに地区内を練り歩く。

こうした山車の行列の先頭に位置し、先払いをして歩く役目として先太鼓(写真1)が存在する。「先

太鼓」と名付けられているが、その演奏は太鼓のみで奏されるのではない。編成の基本は、太鼓（長胴鉦留め太鼓）<sup>1</sup>と篠笛 1 からなっており、両者の

アンサンブルによる華やかな雰囲気音楽である。先太鼓の音楽は、それぞれの町内、演奏者により異なっており、共通性、異質性を合い持つ。



写真 1 五番町の先太鼓と山車  
平成 13 年 9 月 15 日内野四つ角付近で撮影  
画面中央付近で篠笛を演奏しているのは佐藤晋一郎氏

祭礼への参加町内は、近年町郊外に住宅が増加したこともあり、若干増加している。しかし、もともとは、一番町から七番町までの 7 つの町が核となっているものである。従って本研究で扱う範囲もこの 7 つの町内に限ることとし、それぞれの町内で伝承されてきた先太鼓が対象となる。

### III 手順と方法

内野祭及び先太鼓の取材は、平成 13 年 7 月から平成 14 年 3 月までの間に行われた。その内容は以下の通りである。

#### 先太鼓の収録

7 月 14 日から 9 月 14 日の期間、各町内それぞれ

の奏者によって演奏された先太鼓の収録及びインタビューを行った。

#### 内野祭の参観、取材

平成 13 年の内野祭を参観、取材を行った。

#### 先太鼓の伝承者への取材

収録時に加え、後日時間を設定し、先太鼓の伝承者に対し、主として伝承の方法について取材を行った。

#### まとめと授業実践への方向づけ

以上の事柄を、「先太鼓の伝承」「先太鼓の音楽（採譜、音楽的特徴）」「先太鼓の教材性（音楽的側面、文化的側面）」といった観点からまとめるとともに、これらの結果を基として、最終的に授業

実践へ向けて方向性を導き出したい。なお、先太鼓の伝承法についてはすでに、佐藤<sup>5)</sup>のものが存在しており、この研究を先行研究としながら考察を深めていく。

#### IV 先太鼓の歴史と伝承

内野祭の先太鼓に関しては、前述したように佐藤により詳細な記述がある。これによると伝承法の特徴は、第一に、手本を示しそれを真似るといったいわゆる全習法であること、第二に、より高度な規範を示すことが学習者に強い興味を持たせていることであるとしている<sup>6)</sup>。ただし、佐藤の取材時における小学生をあつめた意図的な集団指導を

対象にしている。本章で対象とするのは、それよりも前世代の人々の伝承が中心となる。

筆者のひとり、松浦は代々内野町の住民であり、今でも内野祭の山車に参加している立場から、佐藤とは異なった視点で祭の歴史的な変遷や先太鼓の伝承法について調査し、まとめた。

内野祭の歴史は明治時代、内野村で稲の豊作を祝った秋祭りから始まったようである。昭和の初期、昭和天皇御大典を記念して祭が行われ、その時にいくつかの町内で現在の祭囃子が創作されたということである。写真2は昭和3年当時撮影されたものである。



写真2 昭和3年当時の稲荷組（七番町）の山車  
（松浦 治氏所蔵）

以来、昭和 14 年～15 年頃まで、稲の豊作の年にはいくつかの町内から山車が出されていたということである。

戦時中祭は行われず、戦後の昭和 22 年内野町に「内野町連合青年団」が発足し、この時から現在のように各町内（一番町～七番町）の先太鼓と山車が出るようになったということである。内野には鎮守の社が二つあって昔から春秋 2 回の祭礼が

行われているが、特に秋の祭礼が現在の「内野祭」となって山車が町内を巡回するようになったということである。

内野祭の山車は、昭和 39 年の新潟地震の年から数年間中断の時期があったが、昭和 42 年から再び始まり、昭和 45 年には各町内の山車が全部揃った祭が再び始まって現在に至っている。写真 3 は昭和 43 年の山車である。



写真 3 昭和 43 年当時の七番町の山車  
(松浦 治氏所蔵)

先太鼓は太鼓と笛が一体となって山車を先導していく役割を持っているため、躍動感のある軽快なリズムが特徴である。そこへ笛の賑やかな旋律が加わり、山車を先導しながら祭の雰囲気盛り上げるのである。

内野祭の先太鼓は一番町から七番町まで、総ての町内がそれぞれ独自のリズムと旋律を持っており、このことは祭の形態から見ると大きな特徴であると言えるであろう。

祭の当日は、各町内の山車が町内を縦横に引き回されるが、囃子の音を聴いただけでどの町内の山車かがわかるというわけである。

先太鼓の創作過程については、各町内がそれぞれ異なる歴史的変遷を持っているようであるが、大きく分けると 2 つの系統の分類ができる。一つは、一、三、四、五および七番町の先太鼓が近隣赤塚の「太々神楽」の流れであり、もう一つは二および六番町の先太鼓が新潟の「七夕笛」の流れ

を汲んでいるということである。

先太鼓の伝承について記述するに当たり、まず町内の太鼓と笛の奏者から伝承されてきた過程についてお話を伺い、それを基に筆者なりに伝承法についてまとめてみたいと思う。

まず、各町内の太鼓の奏者に伝承の過程について伺ったところ、異口同音に「先輩の演奏している姿を見聞きしながら自然と覚えた」ということであった。「山車について町中を歩き回り、休憩時間に太鼓を叩いて遊んでいるうちにできるようになった。」という人もいた。しかし、祭に参加するようになるまでには当然先輩から細かい指導を受けるわけである。このように自然な形で伝承が行われてきたわけであるが、その理由として筆者は次のように考察する。

- ・太鼓は叩けば音がでるので、誰でも演奏することができる。
- ・先太鼓のリズムは各町内とも演奏速度に違いはあるが、概ね2拍子系のリズムにまとめることができる。
- ・先太鼓のリズムは軽快ではあるが、比較的単純なリズムの繰り返しであるため、小学校高学年になれば演奏することが可能である。

次に各町内の笛の奏者に伝承の過程について伺ったところ、やはり「先輩の演奏している姿を見聞きしながら覚えた」ということであった。しかし、太鼓の場合との相違点は、「始めは笛を吹こうとしても音を出すことができなかつたが練習をしているうちに音が出るようになり、それから先輩に頼んで1対1で一緒に練習をしてもらってやっ

と吹けるようになった。」という点である。

ほとんどの奏者がこのような経過を辿って先太鼓の笛を習得している。その理由としては次のようなことが考えられる。

- ・篠笛は音を出すことが非常に難しい。
- ・囃しの旋律はかなり複雑にできているため、習得するのに時間が必要である。
- ・笛の音に興味があり、難しくても楽しく練習ができる意欲が必要とされる。

以上のことから先太鼓の笛の奏者はひとつの専門領域を任されることになり、後継者が出てくるまで長期間にわたって担当しているということである。

内野町生まれの筆者が祭の当日は自分の町内の山車に乗って「中囃子」<sup>7)</sup>の笛を担当していることも、同様の経過を辿って祭囃子の伝承を受けたものである。

現在、ほとんどの町内が祭囃子の「後継者の育成」という問題で悩みを抱えているが、調査を行っているうちの一つの町内は、集会所に子供達を集めて先太鼓と笛の指導を行っていることがわかった。指導者の話によると、期間は祭の前2週間、「先太鼓は自分が側について子供が覚えるまで指導する。笛はまず音を出させることに始まり、出るようになったら旋律を歌いながら覚えさせる。最後に自ら笛を持って指使いを示し、曲を吹きながら覚えさせる。」という方法で伝承しているということである。また、子どもは肺活量が少なく、長い旋律を一息で吹くことが出来ないため、3-4人で担当させているということである。

この伝承の仕方は前述した佐藤の指摘するところの全習法に共通するものであるが、笛について

は、段階的な指導を行っている点に特徴がある。

この町内では、最初の年は大変苦労したが、次の年からは覚えた子供から年下の子供へと自然に伝承が行われ、指導が楽になってきたということであるが、これこそ後継者の育成問題を解決する素晴らしい方法ではないかと思う。

戦後間もない頃、内野の祭は、祭を楽しもうとする若者の熱気に溢れた町を挙げての大祭だったそうである。かつては各町内が競い合って手作りの山車を作ったものであったが、最近で近郊の祭で使われた山車（飾りのキャラクターの部分）を購入してすませてしまう町内もある。筆者が子供の頃から祭の最後に行われ、恒例となっていた盆踊りも10年程前から絶えてしまった。その代わりとして出てきたものは「カラオケ大会」である。

時代の変化とともに祭の様式や形態が変化していくことは仕方のないことではあるが、内野町で生まれ、育ち、内野にしかない文化に町民はもっと目を向けるべきだと感じるのは筆者だけではないだろう。

内野の祭囃子のような伝承音楽は住民の誇りであり、財産であるはずである。筆者は今回の調査により、内野の風土に根ざした「祭囃子」の伝承法について認識を新たにしているところである。

## V 先太鼓の音楽

### 1 各町内の先太鼓（採譜）

各町内の先太鼓については、資料楽譜の通りである。それぞれの町内で用いられている笛は5本調子8本調子まで様々であり、中囃子と比較して高音の楽器を好んで用いるが、調子を定められて

いるわけではなく、一人の奏者ですら時に笛の調子を変える。従って、採譜にあたっては町内毎に比較しやすくするために、ミラ型テトラコルドにより共通して示した。

なお、録音および取材場所と奏者名を以下に示す。各奏者は、それぞれ町内の先太鼓を伝承してきた人々である。なお、一番町の笛は伝承が途絶えてしまい、現在は四番町出身者（原田栄三氏）が担当されている。「現在の一番町の笛」ということで収録<sup>8)</sup>している。

#### 一番町（内野大神宮境内）

笛：原田栄三 太鼓：笹川敏春

#### 二番町（広通江団地自治会館）

笛：筑波晃 太鼓：中原剛

#### 三番町（新潟大学教育人間科学部合唱ホール）

笛：田中政人 太鼓：佐藤周蔵

#### 四番町（広通町集会所前）

笛：田巻久栄 太鼓：梶原政春

#### 五番町（新潟大学教育人間科学部合唱ホール）

笛：佐藤晋一郎 太鼓：渡邊渡

#### 六番町（内野六番町内）

笛：野島信行 太鼓：岡田博

#### 七番町（稻荷神社） 笛：松浦良治 太鼓：松浦昇

今回新たに録音したものであるが、録音状態の関係で六番町は途中でやむなく編集を加えたこと、七番町以外は必ずしも囃子の冒頭から始まっていないという点をお断りしておく。MP3形式で収録してあるので、すばらしい演奏を是非お聴きいただきたい。

以下に採譜したものを譜例として示す。

# 一番町先太鼓

採譜 伊野義博  
松浦良治  
森下修次

♩ = 140

篠笛  
太鼓

This musical score is for 'Ichibancho Sentaiko'. It features two staves: the top staff is for the篠笛 (Sho) in treble clef, and the bottom staff is for the太鼓 (Taiko) in bass clef. The tempo is marked as ♩ = 140. The key signature has one flat (B-flat), and the time signature is 2/4. The score consists of two systems of music, each with a repeat sign at the end of the second system.

譜例 1 一番町の先太鼓の楽譜

# 二番町先太鼓

採譜 伊野義博  
松浦良治  
森下修次

♩ = 136

篠笛  
太鼓

This musical score is for 'Nibancho Sentaiko'. It features two staves: the top staff is for the篠笛 (Sho) in treble clef, and the bottom staff is for the太鼓 (Taiko) in bass clef. The tempo is marked as ♩ = 136. The key signature has one flat (B-flat), and the time signature is 2/4. The score consists of four systems of music. The first system has a repeat sign. The second system ends with a double bar line. The third system has a repeat sign. The fourth system ends with a double bar line and the marking 'D.C.' (Da Capo).

譜例 2 二番町の先太鼓の楽譜

### 三番町先太鼓

採譜 伊野義博  
松浦良治  
森下修次

♩ = 140

篠笛

太鼓

譜例 3 三番町の先太鼓の楽譜

### 四番町先太鼓

採譜 伊野義博  
松浦良治  
森下修次

♩ = 140

篠笛

太鼓

譜例 4 四番町の先太鼓の楽譜

### 五番町先太鼓

採譜 伊野義博  
松浦良治  
森下修次

♩ = 188

篠笛

太鼓

譜例 5 五番町の先太鼓の楽譜



# 六番町先太鼓

採譜 伊野義博  
松浦良治  
森下修次

♩ = 158

篠笛

太鼓

譜例 6 六番町の先太鼓の楽譜

# 七番町（稻荷町）先太鼓

採譜 伊野義博  
松浦良治  
森下修次

♩ = 198

譜例 7 七番町の先太鼓の楽譜

## 2 先太鼓の音楽的特徴

### 1) 音階

各町内の笛の音階を比較整理すると以下のようになる。(下線は核音)

一番町	レ <u>ミ</u> ソラ		
二番町	レ <u>ミ</u> ファ <u>ミ</u>	レ <u>ミ</u> ソラ	<u>ミ</u> ソラ
三番町		レ <u>ミ</u> ソラシ	
四番町		レ <u>ミ</u> ソラシ	
五番町		<u>ミ</u> ソラシ <u>ミ</u>	
六番町		レ <u>ミ</u> ソラシ	ソラ
七番町	<u>ミ</u> ファ <u>ミ</u>	<u>ミ</u> ソラシ	

各町内の笛の旋律は、ミソラの音の構成を核として成立している。これらを共通の要素としながらも、次のようなタイプに分類することができる。

・ミソラを基本とした一つの音階により旋律が形成されているもの

一番町：レミソラ

三番町：レミソラシ

四番町：レミソラシ

五番町：ミソラシミ

・陰音階が組み込まれ複数の種類の音階により旋律が形成されているもの

二番町 レミファミ ミソラシ ミソラシ

六番町 レミソラシ ソラシ

七番町 ミファミ ミソラシミ

六番町の音階は、旋律の後半においてソラシといったふうに半音が形成される。一方、七番町では、半音は旋律の前半に現れる。二番町の音階は、これらを統合したような形になっている。なお、二番町と六番町は両方とも旋律の後半にシが現れる。IV章においては、この2つの町内の先太鼓が、新潟の「七夕笛」の流れを汲んでいるが、このことと関係があるのかもしれない。

## 2) 旋律

### 旋律型と組み合わせ

旋律は、小さな旋律型が基になっている。それらは、2小節を最小単位として、4小節(2+2小節)が小フレーズを形成し、さらにそうした小フレーズが複数組み合わせたり、一つの旋律を形作っている。

それぞれの町内の旋律には、類似したものが多く見られるが、こうした小フレーズの組み合わせパターンが、種々に起こっているためとも考えられる。

なお、小フレーズの開始においては、半拍、すなわち8分音符の休符をおいて始まり、しかも次の小節では、1、2拍を多少アクセントぎみに吹く場合が多く、これも特徴となっている。これにより、太鼓との呼吸を合わせ、アンサンブルの妙味を醸し出している。

### 装飾

それぞれの旋律には、奏者が細かな装飾をして旋律が華やかになっている。これらの装飾には、

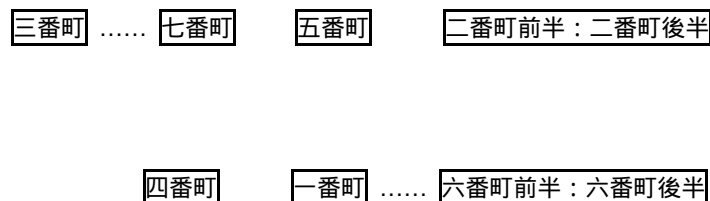
大まかに、隣接音を細かく添えるものと、甲音を吹き旋律を目立たせるものとに大別される。

## 3) 旋律の伝播と変容

各町内の笛の旋律には、過去においては、同一のものと考えられるもの、あるいは明らかに違いに影響しあった形跡が見られるものがある

例えば、五番町と七番町の笛は、元々同一のものと思われる。また、これらは二番町の旋律の前半部分における流れと共通性が見られる。さらに、四番町と一番町は、一番町の笛奏者の出身が四番町であることから、これも元々同一のものと考えられる。このことは、楽譜上では、一見わかりにくいだが、一番町における笛の旋律の開始を四番町の5小節目と考えてながめると理解できる。さらに一番町の旋律と六番町の前半の旋律にも共通性が伺える。

このようにして、それぞれの町内のいわば親戚関係を想定し、図示すると以下の関係が見えてくる(図1)。



### 凡例

- は、元々同一と考えられるもの、
- は、因果関係が深いと考えられるもの
- .....は、関係が考えられるもの

図1 各町先太鼓音楽の相関関係

このように、笛の旋律は、それぞれの町内で互いに影響しあい、個々の旋律が形成されていったものと推測される。また、元々同一の旋律でも様々に変容して

おり、これが、内野の先太鼓の特徴にもなっている。旋律のこうした変容、自由な性格は、音楽の形成として興味のあるところである。

#### 4) リズム

太鼓のリズムは、2小節の小さなパターンの繰り返し基本となっている。これには、いくつかの分類が可能で、その多くは第1のタイプで、一及び三番町のタイプ（|ドーンコ|ドンドン|）またはこれを少し細かく叩く二及び四番町のタイプ（|ドーンコ|ドンコドン|）である。第2のタイプは、五及び七番町で、これらの基本は（|ドンコドンコ|ドンドン|）である。この他に第3のタイプとして、六番町の（|ドンドン|ドンコ|）がある。

これらのリズムフレーズは、各町内とも、アクセントの位置が特徴的である。また、奏者によって細かな装飾（小ばち）が自由につけられて奏され、微妙な「間」とともに各町内や奏者の「味」となっている。

#### 5) テンポ、ダイナミクス

テンポは、およそ楽譜に示した通りである。先太鼓は、山車の行列の先頭において先払いをするのが役目であり、全体的に軽快なテンポで演奏される。また、山車が町の中心部に到着したり、他の町内とすれ違いの場面になったりする時など、速度をあげ、音量を増大させ、人々の気持ちを「囃す」傾向がうかがえる。

#### 6) アンサンブル法

##### 即興性

アンサンブルにおいては、太鼓と笛の間で、様々な即興的な演奏法が見られる。先太鼓のテンポは前述したように、場面により変化する。また、それぞれの奏者は旋律や太鼓のリズムにおいて、即興的な装飾や旋律の変化を試みる。

##### かけあいの妙味

即興的な表現で最も特徴的なものは、二番町と六番町である。この町内の先太鼓は、旋律の後半にシが現れ、陰旋化する部分がある。旋律は普段は前半部を単に繰り返しているだけであるが、時に後半部に移るのである。この後半部に移るのは、笛の奏者の合図による。つまり、笛の二番町の場合、楽譜で笛がソラシと旋律を吹き出すのが、合図となる。太鼓の奏者は、こうして笛の旋律の変化を聞きながら自らのリズムを変えていくのである。

さらに、太鼓と笛双方の拍の伸縮や間の表現においては、奏者が違いの演奏を聴きながら微妙に変化させ、絶妙の味を醸し出している。

## VI 先太鼓の教材性

### 1) 音楽構造的側面

こうして、先太鼓音楽を見ると、非常に奥が深いと同時に核の部分は構造が単純なことから教材には向いていると考えられる。例えば、三番町や五番町の先太鼓の音楽は楽譜にすると僅か6~10小節程度であり、これさえ覚えれば繰り返すことにより延々と演奏することができる。六番町の音楽も同じパターンのフレーズを少しずつ変えて演奏していることが分かる。これらの要素をまとめると次のようになる。

- ・ パターンやフレーズの繰り返し
- ・ パターンやフレーズの組み合わせ
- ・ 旋律装飾
- ・ 変容性（変化し、他と融合していく旋律やリズム）

音楽は何もないところから突然湧いてくる訳で

はない。西洋音楽でも作曲を学ぶ上で変奏曲が重視されている。新しく作られた音楽も現存する音楽に少し手を加えた音楽といえるだろう。すなわち、ここでの先太鼓の音楽のように、単なる伝承ではなく前述のように微妙の掛け合いや即興など手を加えていくことは「音楽を創る」行為そのものに他ならないといえる。また、音楽構造自体も核は単純だがいろいろと変化させているとも考えられる。そういった掛け合いや即興性、音楽構造を利用することにより「つくって表現」<sup>9)</sup>への応用が可能であると思われる。

また、先太鼓は篠笛と太鼓という器楽によるアンサンブルの音楽である。西洋音楽でもソロの表現はなかなか困難なものである。例えば伴奏を伴わないヴァイオリンの作品は存在するが非常に演奏困難なことが多い。アンサンブルではその点について緩和されるし、表現の幅もひろがる。楽しさも大きい。先太鼓のようにある程度決まった音楽の部分を持ちながら自由な即興、掛け合いの要素を持つ音楽は創作に加え、表現の幅も広げてくれるだろう。

## 2) 社会的文化的側面

平成 14 年 4 月より施行される小学校学習指導要領（平成 11 年版）の「総合的な学習の時間の取り扱い」において、「地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。」とある。さらに「次の事項に配慮すること」の項目で「グループ学習や異年齢集団による多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ…(中略)…地域の教材や学習環境の積極的な活動などについて工夫すること。」とある。内野祭りは地域の特色ある文化の一つであり、祭りの練習

など風景はまさに「異年齢集団による多様な学習形態」をとっている。「地域の人々の協力」に支えられて成り立っており、子どもから老人まで年代を超えて地域のコミュニティに大いに役立っている。写真 1 にもあるように子どもたちもお祭りの一員として活躍している。このことから、総合的な学習の時間で内野祭りを取り上げることは指導要領の目的とも一致する。しかしながら、20 数年前までは内野祭りの日は地元の小学校中学校は休校だったが、最近は休校にはなっていない。すなわち以前は地域を挙げての祭りだったのが最近は必ずしもそうではないということであろうか。地元の人に聞くとところによれば、他地域から転入してくる児童生徒が増え、結果的に祭りに参加しない家庭が増えたため、学校側が考慮して休みにしなくなったと聞く。地域のコミュニティを育てることは文化の育成のみならず地域の安全保証にもかかわってくることである。学校の教育現場においても積極的に祭りとかかわっていき、旧来の住民、新しい住民を含めた地域のコミュニティの支援するもあることが望ましいと考えられる。

## VII 授業実践へ向けて

このように教材として優れた特徴を持つ先太鼓の音楽であるが、ここで授業のための試案を提示したい。

学校現場においても、最初から地域の伝承者を指導者として迎えるのが理想であろう<sup>10)</sup>。しかし、現実には難しいことも多い。ここでは容易に導入できる方法を提案する。

### 鍵盤楽器を使う

一般的には祭囃子の学習には篠笛の代わりに容

易に音がでて、縦と横の違いはあるが篠笛と同じ  
 笛の仲間であり普段から使用することの多いリ  
 コーダーが用いられることが多いと思われる<sup>11)</sup>。リ

コーダーも悪くはないが、ここでは鍵盤ハーモ  
 ニカや電子ピアノなど鍵盤楽器を利用した方法を  
 提案する。譜例8を見ていただきたい。

譜例8 拳骨で弾けるピアノ曲

この曲は一見難しそうに見えるが、Piano Iのバ  
 ートは拳骨で弾くことができる<sup>12)</sup>。なぜそういう  
 ことができるかと言えば、Piano Iで弾く音は全て  
 黒鍵だからである。「猫ふんじゃった！」が楽譜に  
 書くと複雑だが誰でもすぐに弾けるようになるの  
 と同じである。日本の民謡や歌謡曲、スコットラ  
 ンド民謡など黒鍵だけで旋律が弾ける曲も多い。  
 これらは俗に「四七抜き音階」と呼ばれる5つの

音からなる音階によって構成されているためであ  
 る。この音階は長2度と短3度のみによって構成  
 される。長調、短調や都節のような短2度を含む  
 音階からなる曲は弾くことができない。ここでは  
 二番町と七番町の先太鼓の音楽がそれに相当する。  
 以下に六番町の先太鼓音楽を教材化したものを示  
 す。

譜例9 教材化された六番町先太鼓（冒頭）

この楽譜では指を割り振ってある。子どもたち  
 に楽譜を見せて弾かせるのは困難だが、指を予め  
 決めてある黒鍵の位置に置き、お手本を見せて弾  
 かせるのは容易であろう。ここでの狙いはこの楽  
 譜を正確に弾かせることではなく、いかに自由に

装飾的に演奏できるかという点にある。さらには  
 オリジナリティのある祭囃子を創作することも視  
 野に入れている。1(親指)~4(薬指)を変ホ~  
 変ロに固定し適当なリズムで自由に弾くだけでお  
 囃子的な旋律を即興的に奏でることができる。太

鼓も小太鼓や大太鼓、なければ樽や机など工夫次第で何でも使える。これも、最初は決められたリズムから初めて、徐々にいろいろな変化を加えていくのが良いだろう。

なお、鍵盤楽器に電子楽器を使用するときは、笛の音色を選ぶとリアルな感じがでるだろう。

#### ボイスパーカッション<sup>14)</sup>

前述のリズムに関する項目で( | ドーンコ | ドンドン | ) とか( | ドンコドンコ | ドンドン | ) といったものがあるが、リズムを表現する場合、楽譜より口唱歌の方が正確に伝わることが多い。実際に雅楽など日本の伝統音楽で口唱歌は欠かせない。

そこで教育の現場でも、特に祭囃子などの伝統音楽を扱う際には積極的に口調唱歌を利用したい。

例えば、( | ドーンコ | ドンドン | ) を何回も繰り返す。それだけではなく徐々に変奏を加えていく。祭囃子の即興性は単調なリズムをより複雑で面白いものに変える可能性をもたらす。

単なる口唱歌とどまらずもっと積極的に音楽を表現するために、最近テレビ番組<sup>13)</sup>で取り上げられ、ブームになっているアカペラの使用を提案する。アカペラとは本来、無伴奏の合唱形態を指す。最近ブームとなっているアカペラとは、マイクを使用することが前提になっていて、かつボーカルにベースとリズムセクション(ボイスパーカッションという)という編成でゴスペル風あるいはポピュラー音楽を表現することを指す。これらは先進的な教育現場ですでに用いられているが<sup>15)</sup>、日本の伝統音楽の教育にも使用したい。

例えば、一人が( | ドーンコ | ドンドン | ) というリズムを繰り返したとしよう。もう一人は

( | ドンドン | ドンドンコ | ) というリズム、もう一人は( | ドンコドンコ | ドンドン | ) を重ねていけばそれだけでも複雑なアンサンブルができる。さらにボイスパーカッションでいろいろな音色を表現すればさらにアンサンブルの幅が広がるだろう。

#### 本物の篠笛と太鼓を使う。

予算的な問題と指導者をどうするか非常に大きな問題だが、本物の楽器を使用した教育がやはり望ましい。特に篠笛は竹管でなくとも安価な合成樹脂のものが売り出されている。問題は指導者の方かもしれない。教育現場の教師が祭囃子に長けていることはあまりないだろうから、地元の塾達者に依頼しなければならない。やはり地域の協力が不可欠である。平成14年度からの学校週休二日制や、部活動を地域の社会教育で行う傾向など、学校と地域の連帯を示唆する傾向がますます強くなると思われる。学校教育の現場に地域の人たちがもっと入り込んでよいのではと考える。

#### 最後に

これらの研究は平成13年度よりスタートした。元々伊野、松浦、森下はまったく別々に研究または活動を行っていたが、附属長岡小学校の中田氏の授業を切っ掛けに共同研究で行うことになった。大学の近くにありながら、今まであまり取り上げられることの少なかった内野の祭りであるが、非常に貴重な地域文化的財産が残っていることが分かった。来年度は地元校の協力を仰ぎながら全国のモデルとなるような実践的な研究に持っていきたいと考えている。

## 文献および注

- 1) 例えば、『音楽科がかかわる総合的な学習 1 地域から学ぶ』教育音楽  
小学版 5 月別冊 音楽之友社 2000 年など。  
あるいは、次の文献に多数紹介されている。  
加藤富美子「日本の民俗音楽における教育実践の動向—主要雑誌等に見る最近 20 年間の実践報告より—」『民俗音楽研究』日本民俗音楽学会 1993 年
- 2) 注 1 の加藤論文におけるまとめによる。
- 3) 岩井正浩「学校教育における口伝・口唱歌学習試論」『季刊音楽教育研究』音楽之友社 pp.147-157 など
- 4) 伊野義博「能生白山神社における稚児舞の習得過程—音楽教育的視点からの考察—」『新潟大学教育学部紀要第 37 巻第 1 号』1995 年 pp.133-142
- 5) 佐藤峰雄「地域社会の伝承法に学ぶ」『民俗音楽の底力』日本民俗音楽学会編 勉誠出版 2001 年 pp.131-141
- 6) 前掲注 5)p.135
- 7) 先太鼓とは異なり、山車の行列の間において奏される囃子のことを「中囃子」と言っている。
- 8) 録音は森下が担当した。
- 9) 小学校学習指導要領（平成 11 年版）文部省
- 10) 平成 14 年度、地元の新潟市立内野中学校で内野の音楽を伝承している地域の人を迎え、授業を行われることが計画されている。
- 11) 例えば教育芸術者の小学校の音楽 5、P35 には「おはやしをつくろう」というタイトルでリーダーと和太鼓を演奏している子どもたちの写真が掲載されている。
- 12) かつて NHK 教育テレビで紹介された曲
- 13) フジテレビ系「力の限りゴーゴー!!」など
- 14) 口だけであたかもドラムを演奏しているかのように聴かせること。一種の声帯模写である。
- 15) 平成 13 年度新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校の研究会で、中田千代子教官が「アカベラ」を取り上げた。